

【農業水利施設の魅力を知ってほしい (No.15) ; 安曇野をうるおす縦堰と横堰 (2024年7月)】

長野県の安曇野地方は、わさび田を流れる清らかな水のイメージから、水が豊富にあるように思ってしまうがちではないだろうか。しかし、農業用水として見ると、安定して水を得るために、大変な努力をしてきた土地である。

水土の礎・安曇野水土記 (<https://suido-ishizue.jp/nihon/07/02.html>) の文章から要約すると、安曇野の農業水路の立地と特徴は、1) 安曇野の複合扇状地は礫が多く扇状地の中腹は水利が良くない、2) 安曇野扇状地の背後にある北アルプスから流下する河川に加えて、中央アルプスから流下する奈良井川から取水して、等高線に平行となる方向に微傾斜で流下させた(横堰)、3) 横堰は、既に開削されている、縦堰(河川から取水後、等高線に垂直方向に流下する用水路)を横切る必要があったことといえる。

今回は、「縦堰と横堰」の特徴を踏まえて、安曇野地方の農業水路を紹介する。

なお文中の地図は、地理院タイルに写真位置番号等を追記して掲載したものである。



図-1 今回紹介する用水路 (詳細は図2~6)

1. 拾ヶ堰・勘左衛門堰（横堰）と温堰（縦堰）

拾ヶ堰は、1790年に計画され1816年に完成した用水路である。用水路沿いにサイクリングロード等が整備されており、歩きやすい。拾ヶ堰は木曾地方から流下する奈良井川から取水する（写真1-A）。取水後まもなく梓川（写真1-B）をサイフォンで潜る。サイフォンができる以前は、拾ヶ堰は梓川の河道内に土俵等を用いて土手を築いて、河川と平面交差していた。そのため豪雨が発生すると土手が流され、その都度補修する必要があったようである。梓川左岸に入ると、写真1-C、1-D、1-Eのような景観に配慮して整備された水路沿いを進む。拾ヶ堰は、国営安曇野農業水利事業によって排水改良に加えて生態系保全、景観形成を配慮した整備がなされた（佐久間ら、2007）。先を進むと烏川に至り、流末となる（写真1-F）。拾ヶ堰頭首工へは、JR大糸線島内駅から徒歩15分である。拾ヶ堰頭首工から烏川合流点まで15kmである。烏川合流点からJR大糸線穂高駅まで徒歩20分である。



写真1-A



写真1-B



写真1-C



写真1-D



写真 1 -E



写真 1 -F

次に勘左衛門堰を紹介する。勘左衛門堰は安曇郡代官、二木勘左衛門により 1685 年に完成した、拾ヶ堰と同じ横堰である。頭首工（写真 1 -G）は奈良井川にあるが、拾ヶ堰頭首工よりやや上流にある。取水後、拾ヶ堰と同様に梓川をサイフォンで越えて梓川左岸を流下する（写真 1 -H）。写真 1 -C あたりで拾ヶ堰を越えて万水川に至る。勘左衛門堰頭首工は松本電鉄信濃荒井駅そばである。



写真 1 -G



写真 1 -H

最後に温堰（ぬるせぎ）である。温堰は縦堰である。水土里ネット長野の WEB（ <https://www.nag-doren.or.jp/canallist/canallist-1278/> ）によれば、「ほとんどが荘園制（平安時代～室町時代）の成立とともに開削されたと言われており、その事業は、一度に成されたものではなく、水田開発と集落成立を意図しながら、堰筋を順次延長する形で行われたと考えられています。」とあり、横堰に比べて古くから利用されている用水路である。

温堰は、現在は梓川頭首工（写真1-I）で取水され、梓川左岸を流下する。横堰に比べて縦堰は写真1-Jのような分水工が多く見られるように感じる。最終的には写真1-Eで拾ヶ堰に合流する。



写真1-I



写真1-J

引用文献：佐久間 節雄、中森 次雄（2007）：拾ヶ堰の施設整備に係わる住民参加事例、農業農村工学会誌、75（8）、721-724.



図-2

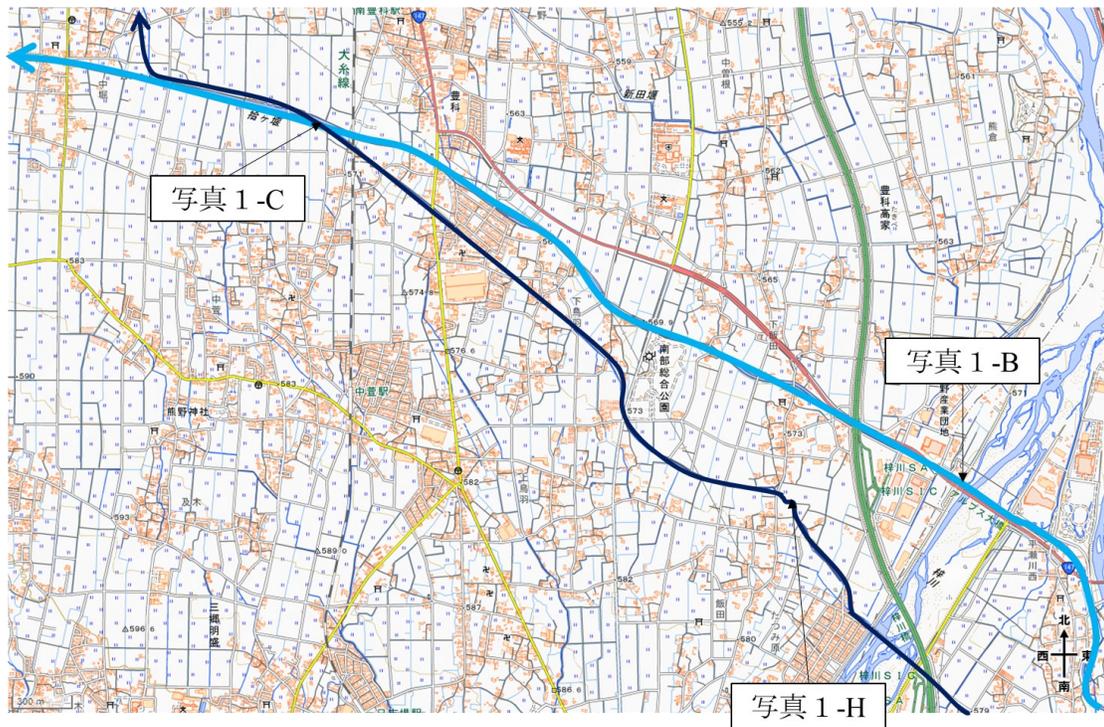


図-3

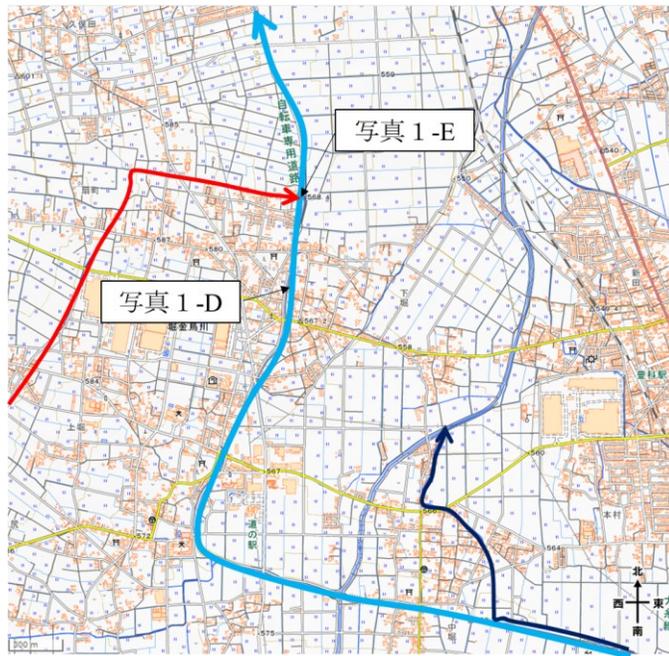


図-4

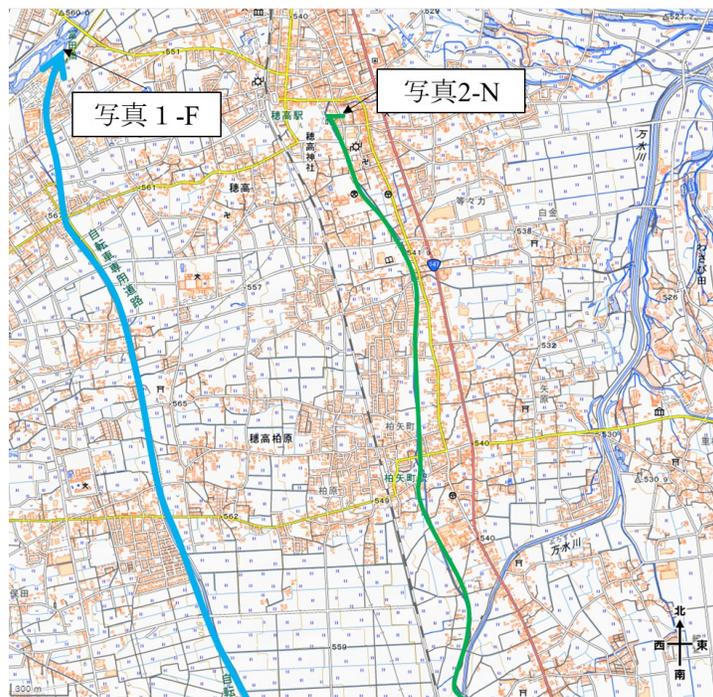


図-5

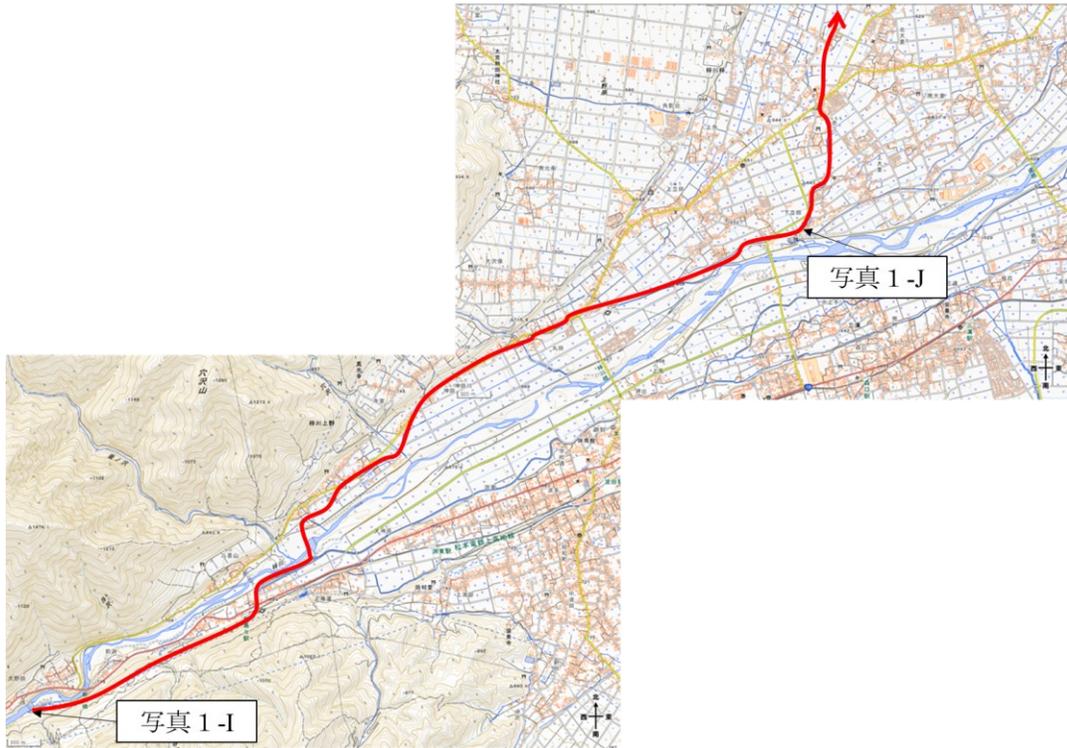


図-6

2. 矢原堰

矢原堰（図-7）は1654年に矢原村の庄屋・臼井弥三郎の主導で開削された用水路である。犀川から取水（写真2-K）し、拾ヶ堰よりやや低い位置を拾ヶ堰とおおむね平行するように流下していく。写真2-Lは水路の様子例である。途中、万水川を越えて（写真2-M）、穂高神社付近で終点（写真2-N）となる。

矢原堰取水口へは、JR 篠ノ井線田沢駅から徒歩25分くらいである。矢原堰取水口から穂高神社までは矢原堰に沿うように歩いて9km程度である。穂高神社からJR 大糸線穂高駅はすぐそばである。



写真 2-K



写真 2-L



写真 2-M



写真 2-N

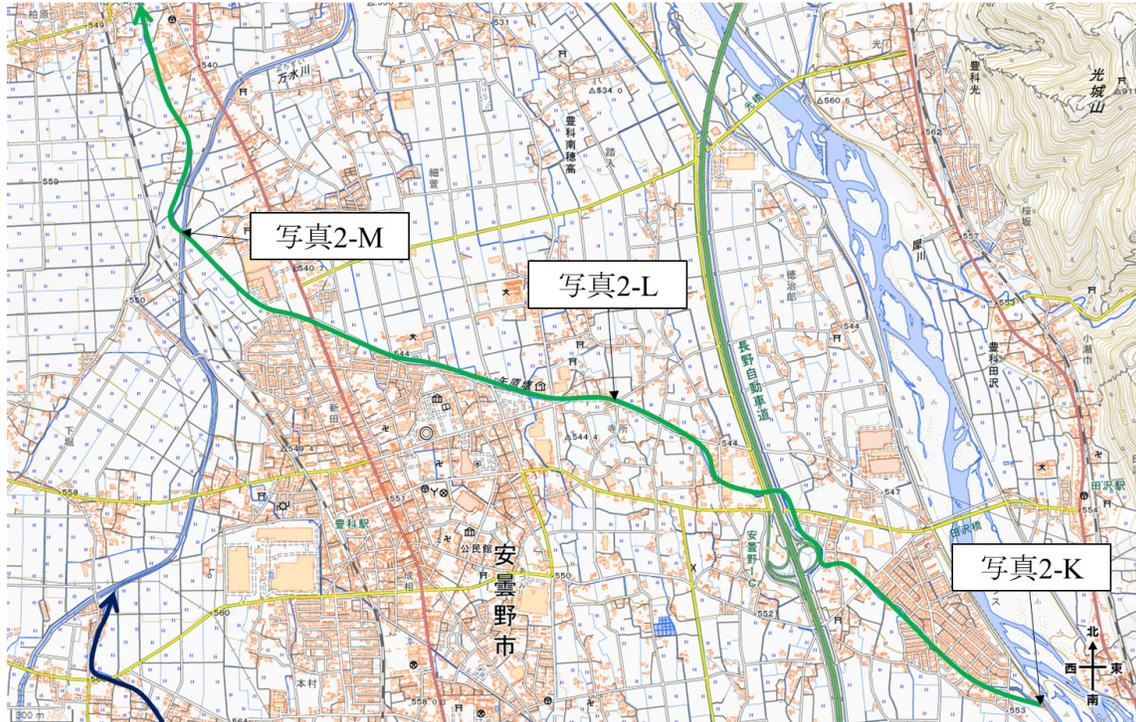


図-7 矢原堰（最下流は図5）

【余談】 姫川源流湧水

安曇野地方を南に流下し犀川へと合流する高瀬川を上流方向に進み流域をまたぐと、日本海への注ぐ姫川流域となる。この姫川の最上流部に、環境省選定名水百選の「姫川源流湧水」がある。水量は豊富で、ちょっとした小川となったようなところには、かんがい用のゲート（図-8、写真3-O）もあり、このような清冽な用水を用いた農作物はさぞ美味しかろうと思う。水草も生え、水路沿いを歩くのも心地よい。

姫川源流湧水へは、JR大糸線南神城駅から徒歩15分程度である。



写真3-O

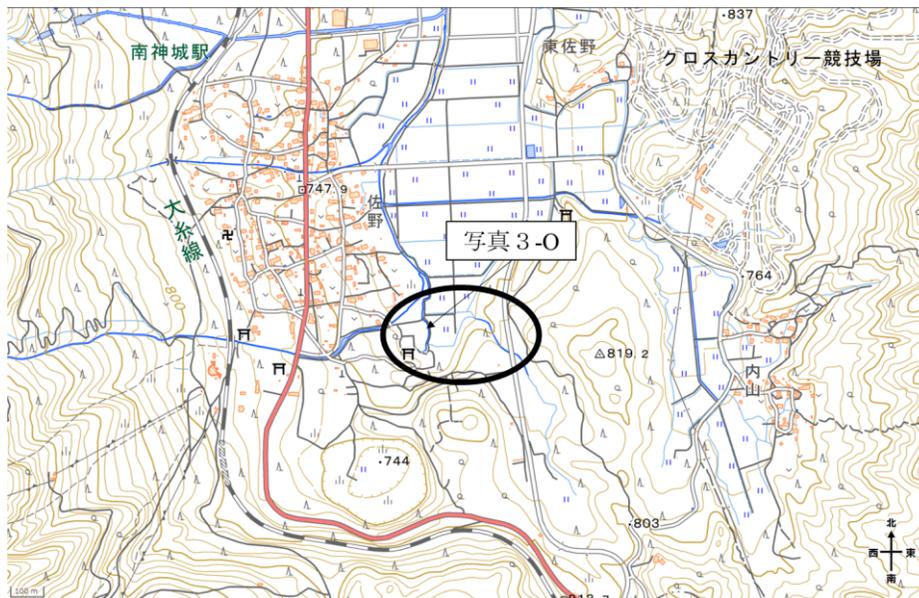


図-8 姫川源流湧水